翻訳つれづれ考

情報学部
原　田　俊　明

1　はじめに

徒然なるままに日ぐらし机に向かい、書斎の閑人の道に勤しみたいと常々思うが、私のような金も無い、力も無い若造にあってはそうもいかない。そこで「忙裏偸閑、苦中作楽」（忙裏に閑を偸み、苦中に楽を作る）を実践すべく、翻訳（但し今回は主にtranslationとtraductionとÜbersetzung）に纏わる些事を心にうつりゆくまま述べてみたい。

2　『徒然草』序段の訳

以上のような拙い 捩 を掲げた機縁から、此処にひとまず誰もが知る兼好法師（1283-1350）の『徒然草』（1330-1331）の序段を引用する。

> つれづれなるままに、日ぐらし（日くらし）硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。[1]

これが、三木紀人による「現代語訳」では以下のようになる。

> 所在なさにまかせて、終日、硯に向って、心に浮かんでは消えてゆくとりとめもないことを、気ままに書きつけていると、ふしぎに物狂おしくなる。[2]

この「現代語訳」は分かりやすい上に文の通りも良い。加えて参考までに35年以上の永きに亘って版を重ねている日栄社編集所（個人名なし）による「口語訳」では、次のようになっている。

> する事もなく退屈で心さびしいのにまかせて、一日じゅう硯に向かって、次から次へと心に浮かんでは消えてゆくくだらないことを、とりとめもなく書きつけてみると、（自分ながら）じつに変で、気ちがいじみているような気がする。[3]

受験生向け参考書の宿命か、上記の日栄社による訳は原文に比して多分に説明的でまわりくどい印象を受ける。「心」、「心」、「気」、「気」と続けざまに出てくるのが文体として宜しくない。

ところで、この「口語訳」で使われている「気ちがい」は、テレビ出演した大学教授から直接

に聞いたところでは、所謂「放送禁止用語」として要注意の言いまわしだそうだ。日栄社も現行の版では問題の個所を改変しているかもしれぬが、私は未見である。最近の古語辞典には「ものぐるほし」の定義として、「普通の精神状態ではなくなってくるようす。正気を失っているようだ。(なんとなく) 気がおかしくなってくる。(なんとなく) 異常な感じがする」[4]、「常軌を逸しているようだ。ばかみたいだ。どうかしている」[5] とある。以前は各社とも真っ先に「気違い」としていたように記憶しているが、世紀転換期の当世に於いては御法度になってしまった。これでは英語の crazy や lunatic といった単語の和訳にも相当に神経を使うことになる。差別撤廃も良いが隔靴掻痒（靴を隔てて痒きを掻く）を地で行く訳文になっては原著者に礼を欠くことにもなろう。

話が逸れたが、いずれにせよ、三木訳も日栄社訳も原文の語順に準拠して訳している。原文も訳文も時代こそ違え、同じ日本語なのだから自明の事だが、私はこの点に着目したい。さて、ここで目を西洋に転じてみよう。アメリカ人のドナルド・キーンは書名を『なまけの随筆』と意訳し、序段を次のように英訳している。

> What a strange, demented feeling it gives me when I realize I have spent whole days before this inkstone, with nothing better to do, jotting down at random whatever nonsensical thoughts have entered my head.[6]

この英文を成るべく順序通りに和訳すると、だいたい以下のようになろう。

> なんと奇妙な、気の狂った気持ちがするのだろう。私が気付くと。一日中硯の前で過ごしたことに。他にもっとましなすべき事が何もなく、手当たり次第に書きつけて、私の頭に入ってきた愚にもつかぬ事を何でも。

さて、ご覧の通りキーンは兼好の原文で最後に来る「あやしうこそものぐるほしけれ」の訳文をいきなり文頭に据えている。安西徹雄の云う「英語では、重要な情報は文章の前のほうにくるのにたいして、日本語ではむしろ、力点は文末にくる傾向がある」[7] という大前提に符合する。しかし翻訳でこれを実践してしまって良いものか、疑問も残る。原文（この場合、14世紀の日本語）の読み手と成るだけ同じ思考の順序で、訳文（この場合、20世紀の現代英語）を読めたらそれに越したことはないと思う。私事になるが、原文の順序に従う訳は、私が英語教員として授業中に学生たちに半ば強要している読み方でもある。英語を英語として理解する橋渡しとしての苦肉の策だ。河野一郎はこうした訳し方を「急流下り型」[8] と呼んでいる。河野は、「英語と日本語のシンタックスの違いを考慮するにしても、書き手がわざといちばん最後に持ってきた結論を訳文で最初に持ってくるようなことは、極力避けなくてはなりません」[9] と述べた上で、原文の文脈を逆にさかのぼる「滝登り型」[10] を諫め、上記２つの型の折衷としての「Uターン型」[11] の訳し方を提唱している。詳しくは「第５のおきて　流れに掉さすな」[12] の章の一読をお勧めする。私は授業でこそ速読即解を目指して「急流下り」を実行しているが、こと翻訳に関しては「Uターン型」に全面的に賛同する。そこへ行くとキーンによる英訳は、正しく意味を伝えた立派な英文ではあるが、順序を改変した点が大いに悔やまれる。

キーンに遡ること53年前の1914年に、『徒然草』は既にウィリアム・N・ポーターによって

『日本の僧侶による雑録』と題されて英訳されていた。ちなみにこの訳書にはロンドン滞在中の市河三喜による4頁に亘るIntroductionもある。ポーターによる序段の英訳はこうである。

> Leisurely I face my inkstone all day long, and without any particular object jot down the odds and ends that pass through my mind, with a curious feeling that I am not sane.[13]

故意に「急流下り」型で下手にこの英文を和訳すると、だいたい以下のようになる。

> のんびりと私は一日中硯に向かう。そして特に何も目的もなく、心を過(よぎ)る種々雑多な事項を書きつける。妙な感覚を抱きつつ。自分が正気ではないという感覚を。

私はこのポーター訳を絶賛したい。日本語の読み手と殆(ほとん)ど同じ思考の順序で英語圏の読者も作品を味わえるように工夫が為されているからだ。出だしの「つれづれなるままに」を“Leisurely”(のんびりと、ゆったりと、気長に)と文頭にもってきて、結びの「ものぐるほしけれ。」を“I am not sane.”と文末に据える手並みは見事なものである。「つれづれなるままに」の訳語が“Leisurely”で果たして良いかどうかは議論の余地も残るが、全体的には頗(すこぶ)る達意の英文である。

フランス語訳ではどうなっているのだろう。以下に『暇な時間』と題されたシャルル・グロボワと吉田とみ子による仏訳から序段を引用する。

> Au gré de mes heures oisives, du matin au soir, devant mon écritoire, je note sans dessein précis les bagatelles dont le reflet fugitif passe dans mon esprit. Étranges divagations.[14]

上記のフランス文を無理やりに片仮名(カタカナ)表記すれば以下のようになる。平仮名(ひらがな)の「はひふへほ」は、喉彦の[r]音と理解されたい。

> オグヘ・ドゥメズゥーッふズワスィッヴ、デュマタン・オスワーッふ、ドゥヴォンモネクひトゥワーッふ、ジュノット・ソンデサン・プへスィ・レバガテッル・ドンルふフレフュジティッフ・パッス・ドンモネスプひ。エトほンジュディヴァガスィオン。

故意に「急流下り」型で下手な仏文和訳をほどこすと、だいたい以下のようになる。

> 自分の暇な時間に任せて、朝から晩まで、筆記具入れを前にして私は明確な目論見(もくろみ)もなく書きつける。束(つか)の間(ま)のはかない照り返りや影が私の意識を過(よぎ)るところの些事を。奇妙なたわ言よ。

このグロボワと吉田による仏訳も、先ほどのポーターによる英訳と同様、成るだけ原文の順序を重んじた点では私の好むところである。ところで英訳で“inkstone”(inkとstoneを組み合わせた造語で、本来は英語に存在しない)になっていた「硯」には、仏訳では「筆記具入れ」を表す

“écritoire”という古風な単語が用いられている。しかし文末の「あやしうこそものぐるほしけれ。」を「奇妙なたわ言よ。」としてしまうのは、やや軽きに過ぎる嫌いもある。

ではドイツ語ではどう訳されているだろうか。オスカル・ベンルによる『静けさからの省察』と題された独訳本から序段を引用する。

> Wenn ich allein und in Mußе bin, sitze ich den ganzen Tag vor meinem Tuschkasten und schreibe alles, was mir durch den Kopf geht, ohne Zusammenhang und ohne eine bestimmte Absicht auf. Dabei ist mir immer recht wunderlich zumute.[15]

上記のドイツ語を無理やりに片仮名表記すれば以下のようになる。平仮名の「らりるれろ」は、喉彦の[r]音と理解されたい。

> ヴェンニッヒアライン・ウントインムーセビン、ズィッツェイヒ・デンガンツェンターク・フォアマイネムトゥーシュカステン・ウントシュらイベアレス、ヴァスミア・ドゥルヒデンコプフゲート・オーネツザンメンハング・ウントオーネアイネベシュティムテアプズィヒト・アウフ。ダーバイ・イストミア・イマーれヒトヴンダーリヒ・ツームーテ。

故意に「急流下り」型で下手な独文和訳をほどこすと、だいたい以下のようになる。

> 独りで暇なとき、私は一日中自分の硯箱の前に座り、自分の頭を過ることなら何でも書きつける。脈絡なく、明確な目論見もなしに。そうして私はいつも相当に奇異な気分になる。

「つれづれなるままに」の訳文に「独り」に相当する“allein”を入れたのは慧眼か、はたまた蛇足か。決めかねるが、確かに兼好法師が独りで居て暇を持て余しているような印象を私は原文から受ける。ドイツ語の読み手には、“allein”という単語を入れないと独りで居ることが伝わらないと考えて、訳者は故意にこの単語を加えたのかも知れない。

3 『方丈記』冒頭の訳

さて、『徒然草』はこのくらいにして、兼好と双璧を為す鴨長明（1155?-1216）による名随筆『方丈記』（1212）の翻訳を考えてみよう。

> 行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。
> 世の中にある人と栖と、またかくの如し。[16]

安良岡康作による「現代語訳」では以下のようになっている。

> 遠く行く河の流れは、とぎれることなく続いていて、なおそのうえに、その河の水は、もとの同じ水ではない。その河の水が流れずにとどまっている所に浮ぶ水の泡は、一方では消

え、一方では形をなして現れるというありさまで、長い間、同じ状態を続けているという例(れい)はない。

世の中に存在する人と住居(すまい)は、やはり同じく、このようなものである。[17]

『方丈記』については夏目漱石（1867-1916）ことK. Natsume（夏目金之助）が既に1891年に、*A Translation of Hojio-ki with a Short Essay on It*と題して全文英訳している。[18] 漱石はその序文としての小論文（a Short Essay on It）の最終段落に次のように断っている。

> In rendering this little piece into English, I have taken some pains to preserve the Japanese construction as far as possible. I was obliged, now and then, to take liberties and to make slight omissions and insertions.[19]

これは山内久明の邦訳では「この小品の英訳にあたり、日本語の原文の構造をでき得る限り留めるよう苦心した。しかしながら言語の質と表現様式の両方の根本的な違いから、時折、一存で多少の省略や挿入を余儀なくされた。」[20]となっている。立派な英文であるし、私は漱石のこうした遣り方に心底共感する。先ほど私が絶賛したポーターによる『徒然草』の英訳も、この漱石と同じ考えで為されたに相違ない。

『方丈記』の題名については漱石自身の付した注釈に、This title may be rendered into English as 'a description of a little house.'とある。[21] つまり「この題名は『或る小さな家の一つの記述』と英訳できよう」というわけだ。しかしこれではまるで小さな家を細部に亘って描写した文章と勘違いされかねない。まあ、文豪への些細な言い掛りはこのくらいにして、この英訳の経緯(いきさつ)について、小宮豊隆の昭和十年版『漱石全集第十四巻』への解説を読もう。漢字は新字体にする。

> 解説つきの『方丈記』英訳は、［中略］明治二十四年十二月八日の日附を持ってゐる。是には当時の文科大学教師ジェームス・メイン・ディクソンが朱を入れ、激賞の評語を書いてゐるが、ディクソンは是を基礎として、明治二十五年二月十日の『日本アジア協会』の例会で、"Chomei and Wordsworth: A Literary Parallel"の題下に講演を試み、且つこの『方丈記』英訳に多少の手を入れたものを朗読してゐる。さうして是は"A Description of My Hut"と改題されて、ディクソンの名前で、明治二十六年の『日本アジア協会会報』に、講演とともに掲載され、その初めにディクソンは、この翻訳の原稿・解説・並に翻訳の細部の説明に関しては、文科大学英文科学生夏目金之助君の、価値ある助力に俟つ所甚大であつたと書いた。恐らく漱石はディクソンから頼まれて、是を翻訳し、是を解説したものに違ひない。[22]

長々と引用したが、要するに24歳の夏目金之助はJames Main Dixon(ジェイムズ メイン ディクソン)なるスコットランド人教官に利用されたようである。それにしても死後出版の全集に拾われたものを除いて、漱石が後世に翻訳を残さなかったのは聊(いささ)か残念に思われる。創作のみならず翻訳にも果敢に取り組んだ鷗外とは好対照である。ところで漱石の翻訳に対する態度を我々に垣間見させるものとして、明治41年（1908年）に朝日新聞に連載された『三四郎』の第12章に次のようなハムレット観劇のくだりがある。漢字は新字体にする。

其代り台詞は日本語である。西洋語を日本語に訳した日本語である。口調には抑揚がある。節操もある。ある所は能弁過ぎると思はれる位 流暢に出る。文章も立派である。それでゐて、気が乗らない。三四郎はハムレツトがもう少し日本人じみた事を云つて呉れゝば好いと思つた。御母さん、それぢあ御父さんに済まないぢああありませんかと云ひさうな所で、急にアポロ抔を引合ひに出して、暢気に遣つて仕舞ふ。それでゐて顔附は親子とも泣き出しさうである。[23]

ここで作者の漱石は一抹の滑稽味を交えながらも、翻訳という行為の虚しさをそれとなく吐露していると読める。引き合いに出されている戯曲は無論ウィリアム・シェイクスピア(1564-1616)作、坪内逍遥（1859-1935）訳の『ハムレツト』（翻訳初演1907年、翻訳刊行1909年）である。さて、話が逸れたが、若かりし漱石による英訳『方丈記』とその拙訳（またしても下手な「急流下り」型）を冒頭のみ下記に引用する。

Incessant is the change of water where the stream glides on calmly: the spray appears over a cataract, yet vanishes without a moment's delay. Such is the fate of men in the world and of the houses in which they live.[24]
絶え間なきかな、水の変化は。流れが静かに滑り行く水の変化は。飛沫は奔流を蔽って現れ、それでいて消えゆく。一瞬たりとも遅れずに。斯くの如きが定めである。世の人々の、そしてその住む家々の。

流麗な英文だと思うが、その実、部分的にはかなり自由な訳でもある。原文の「よどみに浮かぶうたかた」を“the spray appears over a cataract”（飛沫は奔流を蔽って現れ）と訳すのは如何なものかと思うが、それでいて“bubbles floating on a stagnant pool”などと直訳するより、かえって原文にはない躍動感が出てくるような気もする。

別の訳者による英訳を見ることにするが、再びドナルド・キーンに登場願おう。キーンは『方丈記』を *An Account of My Hut [Hojoki]*（我が小屋の物語）としている。以下に冒頭と「急流下り」型の拙訳を引用する。

The flow of the river is ceaseless and its water is never the same. The bubbles that float in the pools, now vanishing, now forming, are not of long duration : so in the world are man and his dwellings.[25]
河の流れは絶え間なく、その水は決して同じではない。淀みに浮かぶ泡沫は、今や消え、今や形を為し、長く持続はしない。世にあって斯くの如きが人とその住みかである。

これは同じキーン訳でも先ほど見た『徒然草』より格段に私の好みに合致する。原文の流れに乗ってうまく訳しているばかりか、原文の「かつ消え、かつ結びて、」という流麗な対句表現を“now vanishing, now forming,”と、さらりと訳している。

英訳は他にもある。A・L・サドラーは『方丈記』を『十平方フィートの小屋』と題し、冒頭を次のように訳した（「急流下り」型の拙訳も付す）。

Ceaselessly the river flows, and yet the water is never the same, while in the still pools the shifting foam gathers and is gone, never staying for a moment. Even so is man and his habitation.[26]
絶え間なく河は流れる。それでいて水は決して同じものではない。一方で淀んだ淵では場所を変える泡が集まっては消えてゆく。決して一瞬たりとも留まることなく。なお一層に斯くの如きが人とその住みかである。

全体として遜色はない。原文の「かつ消え、かつ結びて、」を“gathers and is gone,”と訳すことで、[g]の音の頭韻を響かせているところは上手いと思う。

次に仏訳に目を移そう。訳者には個人名がなく、R・P・救世主カンドォなる慈善団体か宗教団体と思しき人たちが訳したことになっている。以下に『我が僧侶小屋の覚え書き』と題された『方丈記』の冒頭を引用し、発音の片仮名表記と「急流下り」型の拙訳を付す。

La même rivière coule sans arrêt, mais ce n'est jamais la même eau. De-ci, de-là, sur les surfaces tranquilles, des taches d'écume appaissent, disparaissent, sans jamais s'attarder longtemps. Il en est de même des hommes ici-bas et de leurs habitations.[27]
ラメェムひヴィエーッふ・クール・ソンザヘ・メ・スネパジャメ・ラメェモォ。ドゥッスィ・ドゥラ・シュッふレシュふファッストはンキール・デタシュ・デキュムァペス・ディスパヘッス・ソンジャメサタふデ・ロントン。イロンネ・ドゥメェム・デゾッムイッスィバ・エドゥルォーッふザビタスィオン。
同じ河は休みなく流れるが、それは決して同じ水ではない。あちこちに、穏やかな水面に、泡の斑点が現れ、消える、決して長居することなく。そのことは同様に当てはまる。人間どもに、この世で。そしてその住居に。

この仏訳者は、原文の「かつ消え、かつ結びて、」を「あちらで消えたかと思うと、こちらで出来ていたり、」と解釈して、「あちこちに」の意味の慣用句“De-ci, de-la”を第2文の文頭に据えている。

次にドイツで刊行されて間もない、ニコラ・リスクーティン訳の『我が小屋からの手記』の冒頭を引用し、発音の片仮名表記と「急流下り」型の拙訳を付す。

Unaufhörlich strömt der Fluβ dahin, gleichwohl ist sein Wasser nie dasselbe. Schaumblasen tanzen an seichten Stellen, vergehen und bilden sich wieder－von groβer Dauer sind sie allemal nicht. Gleichermaβen verhält es sich mit den Menschen und ihren Behausungen.[28]
ウンアウフホェアリヒ・シュトゥれームデアフルースダーヒン・グライヒヴォール・イスツァインヴァサー・ニーダスゼルベ。シャウムブラーゼン・タンツェンアンザイヒテンシュテレン・フェアゲーエンウントビルデンズィッヒ・ヴィーダー。フォングローサーダウアー・ズィントズィーアレマールニヒト。グライヒャーマーセン・フェアヘルトェスズィッヒ・ミッデンメンシェン・ウントィーれンベハウズンゲン。

間断なく河は迸り去る。それにも関わらずその水は決して同じものではない。浅い所で泡沫が踊る。そして消え失せ再び生じる。それらが長続きすることはない。同様にそのことが当てはまる、人間とその住みかにも。

原文の「よどみに浮かぶうたかたは、」の部分が、「浅い所で泡沫が踊る」となっているのには面食らった。「よどみ」を「浅い所」と訳して誤訳にならないのか。私なら第2文をむしろ、"Schaumblasen an Stockungen da vergehen und da bilden sich,"（シャウムブラーゼン・アンシュトックンゲン・ダーフェァゲーエン・ウントダービルデンズィッヒ。淀みに於ける泡沫はあちらで消え、こちらで生じる）のように訳したい。

4 『吾輩は猫である』冒頭の訳

翻訳についての疑問と云えば話題がまた漱石に移るが、私は常々、『吾輩は猫である』(1905)の英訳本の題名が*I Am a Cat*であることに疑念を抱いてきた。例えば柴田勝衛と甲斐元成の2人は、「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」という、かの有名な出だしを次のように訳している(「急流下り」型の拙訳を付す)。

> I am a cat but as yet I have no name.[29]
> 私は猫だが、しかしまだ私は持っていない、名前を。

また、伊藤愛子とグレイアム・ウィルソンの2人による訳（「急流下り」型の拙訳を付す）も似たり寄ったりで、

> I am a cat. As yet I have no name.[30]
> 私は猫だ。まだ私は持っていない、名前を。

となっている。前任者による余計な"but"を外して、漱石の原文どおり文を2つに分けたのは良いと思うが、「吾輩」という一人称代名詞を使う「猫」の威張った感じが伝わらない憾みが残る。

ジャン・ショイーによる仏訳本も同様に、「ジュスィ・アンシャ。私は猫だ。」になっているのが気に入らない。出だしはこうである（発音の片仮名表記と「急流下り」型の拙訳を付す)。

> Je suis un chat. Je n'ai pas encore de nom.[31]
> ジュスィ・アンシャ。ジュネパゾンコーッふ・ドゥノン。
> 私は猫だ。私は持っていない、まだ名前を。

しかしこの仏訳本には丁寧な脚注が付いていて、それにはこう書いてある（「Uターン」型の拙訳を付す)。

Je suis un chat: l'auteur produit un effet comique par l'emploi d'un mot, sans équivalent exact en français, pour le pronom de première personne, qui était employé par les fonctionnaires, les militaires, les hommes politiques, etc., et donnait une impression d'arrogance.[32]
『吾輩は猫である』。作者は、フランス語にぴったり当てはまる訳語がない単語であり、役人や軍人や政治家等によって用いられた一人称の代名詞を使うことで喜劇的な効果を作り出し、且つ傲慢な感じを醸(かも)し出した。

ところで漱石は生前、Young(ヤング)という謎のアメリカ人男性に日本語の『吾輩は猫である』を贈ってよこし、自筆の献辞を認(したた)めた。尤(もっと)も漱石自身、ヤングという人物には面識がなかったらしく、明治42年（1909年）3月12日の日記に、

「ヤング」なるもの手紙をよこす。「ヤング」とは何者なるや知らず。亜米利加人のひま人なるべし。[33]

と書いている。また、「この献辞を記された本は、ハーバード大学燕京図書館に所蔵されている」[34]そうだ。前置きが長くなったが、以下に漱石が書いたという奇妙な英文を引用する。

Herein, a cat speaks in the first person plural, we. Whether regal or editorial, it is beyond the ken of the author to see. Gargantua, Quixote and Tristram Shandy, each has had his day. It is high time this feline King lay in peace upon a shelf in Mr Young's library. And may all his catspaw-philosophy as well as his quaint language, ever remain hieroglyphic in the eyes of the occidentals!

K. Natsume
Tokyo, Japan
17 May 1908[35]

前傾の『漱石全集第二十六巻』の最新版には山内久明による邦訳があるので、下に引用する。

本作品においては、一匹の猫が第一人称複数（we）で語ります。第一人称複数が君主の物言いであるのか、論説主幹の物言いであるのか、作者も知る由のないところでございます。かつてはそれぞれに時めいたガルガンチュア、ドン・キホーテ、トリストラム・シャンディーのいずれも、今や色褪せております。今こそこの猫界の王者が、ヤング氏の書棚に鎮座しますことは、まことに時宜に叶っております。そして、風変わりな猫語とともに、猫足的哲学のすべてが、西洋の読者にとって、意味深長であり続けますようにと願っています。[36]

1908年5月17日、日本国東京にて
K. Natsume（夏目金之助）

なかなか見事な邦訳（但し下の2行は拙訳）だが、元の英文はひどいものである。寡聞にして存じぬところであるが、全集の注解でも、その他の漱石研究書でも、この英文の稚拙さに言及した文章を私はついぞ見たことがない。文豪に対する気後れからだろうか。それにしても、この英文は変に気負っているわりに文体が支離滅裂で、文法的にも破格である。例えば、"beyond the ken of the author to see"なぞは、その最たるもので、漱石は所謂「too～to構文」と混同したのか、蛇足たるto不定詞を添えてしまった。1891年にあれほど見事な英文を書いていた金之助青年が、16年と数ヶ月後にどうしてこうなってしまったか。或いは件の献辞は贋作かもしれない。不遜ながらも私は先日以下のような改良を提案し、英国Nottingham大学のNorman Page名誉教授のお墨付きを頂いた。尚、拙訳の文中に見られる"*Rex felis*"は「猫たる王侯」という意味のラテン語である。

To Mr Young:

Herein speaks a cat in the first person plural. Whether 'tis regal or editorial is a matter beyond the ken of the author. It would be a seasonable suggestion that this *Rex felis* should lie in your library, for Gargantua, Quixote and Tristram Shandy have all seen better days. May his cat's-paw philosophy in his quaint language ever remain esoteric in Western eyes.

Kinnosuké Natsumé
17 May 1908
Tokyo, Japan

さて、漱石の英語力低下はともかくとして、私は原著者（漱石）が「猫」に英語では"we"で喋らせている箇所が特筆に価すると思う。「吾輩」という威張った一人称には「朕」に相当する英語を当てようというわけだ。これは私が常々考えていたことと合致する。有名な出だしは下記の通りでどうだろう。

We call ourself "the Cat", with no name attached so far.

左様、"ourselves"ではなく、「朕」に呼応する再起代名詞"ourself"である。漱石による上記の献辞の英文を先だって見つけて始めて読んだ折、私は『吾輩は猫である』即、*I Am a Cat*という図式から解放された気がして独りで為たり顔になった。

現行の翻訳では数年前に刊行されたオットー・プッツによる独訳本だけが辛うじて題名で*Ich der Kater*（イッヒ・デァカーテァ。我こそ件の雄猫）と、定冠詞を用いることで原文のもつ独特の自意識を幾分かは再現している。開口一番こうである（発音の片仮名表記と「急流下り」型の拙訳を付す）。

Gestatten, ich bin ein Kater! Unbenamst bislang.[37]
ゲシュタッテン・イヒビン・アインカーテァ。ウンベナームスト・ビスラング。

ちょっと失礼。僕は猫（雄猫）です。名前はついてません、今のところ。

残念ながら原文の傲慢さは出て来ないが、何か初々(ういうい)しい文体ではある。

5 『歴史の終わり』とヘーゲルと

さて、名作の冒頭の文章とその訳文とを掲げて、他人の翻訳を何やら偉そうに評してきたが、読者の中には「じゃあお前はどうなんだ」と詰問したい向きもあろうかと思う。白状するが、私が自らの名を冠して訳出したものは遺憾ながら一つとして無い。請われて時々携わっている国際ロータリー関係の書類の英訳や和訳のほかに、仕事として特筆に値するのは（若干暴露ネタになるが）、大学院時代の1991年の夏休みに、他の院生と手分けして行なったFrancis Fukuyama, *The End of History and the Last Man*の下訳（ghost writer ならぬghost translatorのそのまた下請け）であろう。これは後にフランシス・フクヤマ『歴史の終わり』となり、この邦訳は西洋哲学と国際政治を論じたお堅い２巻本ながら（但し、邦訳が２巻ということであり、原書では１巻）、信じ難いことに後に本邦ベストセラーのリストに入った。しかしながら私が手にしたのは出来高制の微々たる下訳原稿料のみで、印税など望むべくもなかった。尤も全部で31章あるうちの４つの章とそれに対応する注釈を下訳しただけなので、あまり文句は言えないかもしれない。

この本の翻訳作業が進行していた時点では、まだアメリカ本国でも（原著者は日系３世のアメリカ人）ハードカヴァーすら出ていなかった。院生たちはパソコンから打ち出され、且つ、所々手書きで校正の入った「生原稿」のような代物と格闘した。ちなみに下訳した院生たちは、「訳者」の大先生とは何の面識もなければ、何の打ち合わせも無かった。ただ、我々を管轄していたフリーランスのゴゥスト・トランスレイターのM氏とは訳語の統一のことで何度か接触する機会をもった。訳の完成の頃に会ったときには、「苦節15年にして、もうすぐ自分の名前で翻訳（『歴史の終わり』とは別物）が出せる」と云って満足げだったのを憶えている。翻訳家の世界もなかなか厳しいな、と内心思ったものである。

私は先ほど自分が印税も貰えず、本に名前も出してもらえなかったと述べたが、しかしそれより悔しかったのは、私が良かれと思って行なった大胆な訳文が、刊行された時点で改変されていたことだった。この本にはG. W. F. Hegel(ヘーゲル)やらFriedrich(フリードリッヒ) Nietzsche(ニーチェ)やらの引用があり、それは英訳の場合が多かったが、短い文章ではドイツ語の原文の場合もあった。例えば私は次のようなヘーゲルの『法の哲学』からのごく短い引用文に梃子(てこず)摺った。

Es ist der Gang Gottes in der Welt, daβ der Staat ist.[38]
エスイスデァガングゴッテス・インデァヴェルト、ダースデァシュタートイスト。

過去に出た訳を比較して見ると、「国家が存在することは世界に於ける神の道行きであり、」[39]や、「国家が存在することは世界における神の進行であり、」[40] とあるが、“der Gang Gottes”(デァ ガング ゴッテス)の訳が「神の道行き」や「神の進行」では何の事やら私の頭には理解できなかった。フクヤマ自身によるNotes（注釈）を参照しても、“the march of God”や“the way of God”と英語には訳せよう[41]、となっていて、いざ日本語に訳すとなると途方に暮れてしまった。（ところで“the way”ならまだしも、“the march”は悪文ではなかろうか）。結局私はドイツ人教員に全体的な意味を

平易な言葉で教示してもらった上で、「国家の存在は世界に於ける神の意志である。」という訳文に落ち着いた。しかし出来あがった三笠書房の邦訳では「意志」の箇所が「行ない」に改められていた[42]。とは云え、或いは「行ない」で良かったのかも知れない。いづれにしろ原文の“der Gang”の訳は、邦訳であれ英訳であれ難渋を窮める。

しかしその実この“Gang”なる語は、ドイツ語の語彙としては至極基本的なSimplex（単一語）であり、現にドイツをはじめとした独語圏諸国へ行けば、“Eingang”や“Ausgang”といったKompositum(複合語、合成語)の表示をあちこちで頻繁に目にすることになる。左様、“Eingang”は「入口」で、“Ausgang”は「出口」である。そう考えると“Gang”は日本語の「口」に相当するということになり、先ほどの“der Gang Gottes”は「神の口」となる。石器捏造の「神の手」やら「天皇を中心とする神の国」よりは幾分ましかも知れないが、斯かる屁理屈は通らないであろう。

6　おわりに

今後、私としては気に入った作品に時間を割いて、出来る限り良質な翻訳を上梓してみたいと願っている。取り敢えずは1931年にイギリスで刊行された比較的簡単な伝説集の邦訳を手がけようと思っている。しかし版権のことがやはり気になったので、イギリスの出版元に手紙を書いたが、現在では誰が版権を保有しているのか不明との返事が来た。その大手出版社としては邦訳の刊行自体は差し停めないそうなので、赤字覚悟でも出版したい意欲が沸いてきた。聊か「竜頭蛇尾」に堕した嫌いもあるが、辰から巳へと移行して間もない昨今に於いては、時宜を得た雑文の終わり方と云えよう。

注

1 三木紀人『徒然草（一）全訳注』（講談社学術文庫1979年）27頁
2 同書同頁
3 日栄社編集所『要説　徒然草』（日栄社1963年）9頁
4 『ベネッセ全訳古語辞典』（ベネッセ・コーポレーション1996年）
5 『ベネッセ古語辞典』（ベネッセ・コーポレーション1997年）
6 Kenko. *Essays in Idleness: The Tsurezuregusa of Kenko.* Translated by Donald Keene (Tokyo: Charles E. Tuttle, 1967) p. 3
7 安西徹雄『英語の発想』（ちくま学芸文庫2000年）26頁
8 河野一郎『翻訳のおきて』（DHC1999年）72-73頁
9 同書71頁
10 同書73頁
11 同書73頁
12 同書67-79頁
13 Kenko Yoshida. *The Miscellany of a Japanese Priest:Being a Translation of Tsure-zure Gusa.* Translated by William N. Porter (London:Humphrey Milford, 1914). 但し、ここでは復刻版（Tokyo:Charles E. Tuttle, 1974. p. 9）から引用した。
14 Urabe Kenkô. *Les heures oisives (Tsurezure-gusa).* Traduction de Charles Grosbois et Tomiko Yoshida (Paris:Éditions Gallimard, 1968) p.45

15 Yoshida Kenko. *Betrachtungen aus der Stille: Tsurezuregusa.* Aus dem Japanischen übertragen von Oscar Benl (Frankfurt am Main:Insel Verlag, 1963) p. 5
16 安良岡康作『方丈記　全訳注』(講談社学術文庫1980年) 13頁
17 同書14頁
18 夏目金之助　初版『漱石全集第二十巻』(漱石全集刊行会1929年) 249-273頁。実際には岩波書店が刊行に携ったが、周知の如く初版にのみ岩波書店の社名がない。
19 同書259頁
20 夏目金之助　最新版『漱石全集第二十六巻』(岩波書店1996年) 362頁
21 夏目金之助　初版『漱石全集第二十巻』(漱石全集刊行会1929年) 261頁
22 夏目金之助　最新版『漱石全集第二十六巻』(岩波書店1996年) 569-570頁より孫引きした。
23 夏目金之助　初版『漱石全集第五巻』(漱石全集刊行会1929年) 286頁
24 夏目金之助　初版『漱石全集第二十巻』(漱石全集刊行会1929年) 261頁
25 Donald Keene, ed. *Anthology of Japanese Literature:Earliest Era to Mid-Nineteenth* Century (Tokyo:Charles E. Tuttle, 1956) p.197
26 *The Ten Foot Square Hut and Tales of the Heike: Being two thirteenth-century Japanese classics, the "Hojoki" and selections from the "Heike Monogatari".* Translated by A. L. Sadler (Tokyo Charles E. Tuttle, 1972) p. 1
27 Kamo no Chômei. *Notes de ma cabine de moine (Hôjô-ki).* Traduction du R. P. Sauveur Candau (Paris:Éditions Gallimard, 1968) p.263
28 Kamo no Chomei. *Aufzeichnungen aus meiner Hütte.* Aus dem Japanischen übertragen von Nicola Liscutin (Frankfurt am Main u. Leipzig:Insel Verlag, 1997) p. 7
29 Soseki Natsume. *I Am a Cat: A Novel.* Translated by Katsuei Shibata and Motonari Kai (Tokyo:Kenkyusha, 1961) p. 1
30 Soseki Natsume. *I Am a Cat.* Translated by Aiko Ito and Graeme Wilson (Tokyo: Charles E. Tuttle, 1972) p.21
31 Natsumé Sôseki. *Je suis un chat.* Traduit du japonais par Jean Cholley (Paris:Éditions Gallimard, 1978) p.23
32 *Ibid.*
33 夏目金之助　最新版『漱石全集第二十六巻』(岩波書店1996年) 534頁の注解より孫引き。
34 同書557頁
35 同書284頁。この部分、1909の移し間違いだろうか。或いは漱石自身が西暦の数字を誤ったか。
36 夏目金之助　最新版『漱石全集第二十六巻』(岩波書店1996年) 534-535頁
37 Natsume Soseki. *Ich der Kater.* Aus dem Japanischen übertragen von Otto Putz (Frankfurt am Main u. Leipzig:Insel Verlag, 1996) p. 7
38 Francis Fukuyama. *The End of History and the Last Man.* (New York:The Free Press, 1992) p.199からの孫引き。
39 G. W. F. ヘーゲル『法の哲学』速水敬二・岡田隆平訳 (鉄塔書院1931年) 390頁
40 G. W. F. ヘーゲル『法の哲学』高峰一愚(いちぐ)訳 (創元社1951年) 130頁
41 Francis Fukuyama. *Op. cit.* p.373
42 フランシス・フクヤマ『歴史の終わり (下)』渡部昇一訳 (三笠書房1992年) 56頁